日本語教育の、日本語教育による、日本語教育のための会話研究

佐々木　泰子

1. 会話研究の位置づけ

本章には、「turn-taking に関する研究」（金志宣）、「あいづちに関する研究」（陳姿菁）、「電話の終結部に関する研究」（林美善）、「ビジネス日本語教育に関する研究」（李志暎）、それぞれのレビュー論文が収録されている。

会話を素材にした研究には社会学・文化人類学・言語学・教育学など様々な分野からのアプローチが見られる。そこに共通しているのは社会的コンテクストを排除した言語へのアプローチを否定し、現実に話されている言語を記述し、観察するというアプローチである。さらに、話し手であり、聞き手である私たち人間、またその人間が言語活動を通して構成する社会をも視野に入れた研究であると言えよう。

茂呂(1997)では、談話を「ひとまとまりの言葉」と定義し、談話以外にも会話や対話といった概念が用いられる場合もあるとしている。そして談話を素材にした研究にはアプローチの仕方によって＜談話分析＞、＜会話分析＞、＜インターアクション分析＞、＜認知的エスノグラフィー＞の４種類の呼び方があり、それぞれ以下のように異なる学問領域を背景として発展し、互いに影響を与え合い、重なりも多いが、理論的な対立をはらんでいる場合も少なくないとしている。

談話分析： 言語学、社会言語学、ことばの民俗誌研究

会話分析： 社会学の一つの領域であるエスノメソドロジー

インターアクション分析： 認知科学のインターフェース研究、CSCW 研究（コンピュータに支援された協同作業に関する研究）

認知的エスノグラフィー：心理学の社会文化的アプローチ、活動理論

このように同一のものを素材とした研究に異なる呼び方があるのだが、本章の執筆者が論文中で主に「会話」という用語を用いていること、さらにそのような「垣根」を取り去り、学際的な研究を進めることで日本語教育に有益な示唆を得ることができるのではないかと考え、本稿では会話研究という用語を用いた。

2. 日常会話の観察と語学教育

私の手元に『ファミリー米会話　AMERICAN FAMILIES IN TOKYO』（The Japan Times）という英会話のテキストがある。私はこの本を、著者である水谷信子先生からいただいた。このテキストは今からおよそ 35 年前、1968 年に出版された。

このテキストには５つの米国人家庭で実際に話された会話が載せられている。その当時、先生はアメリカやカナダの大学から留学してきた大学生に日本語を教える傍ら、日本人大学生に英語を教えていらっしゃった。先生は、その頃よく使われていたテキストには、彼らが母語で話すような生き生きとしたリズムのある、テンポの速い会話とは異なり、意味は通じるけれども実際には使われない会話例が並んでいることを残念に思われていた。自然な会話を身につけるには、実際に話されている通りの会話を勉強するのが一番良いと考えられた先生は、東京在住の米国人家庭で実際に話された会話をもとにテキストを作られた。それがこのテキストである。

先生は、大きな「録音機」をかかえて日本に滞在するアメリカ人の家庭の居間に「録音機」を置き、それを文字起こしした当時の大変さを懐かしそうに話してくださった。このテキストにはあいづちはもちろん、会話の重なりまで再現され、言葉の意味だ

けではなく、使われ方や文化的背景にまで言及されている。今から 35 年も前にそのような発想でテキスト作りをなさったことに驚きとともに敬服の念を抱かずにはいられない。

先生の「日本語研究」はあくまで日本語教育の視点からであり、早くから言語と文化、社会の関係を取り入れた研究をなさっていた。現実に話されている会話の実態を明らかにし、日本語会話の構造の解明、日本語と日本文化、社会の関係を探り、さらにそれを日本語教育へと応用された。もともとは文章・文体研究に関心のあった私は、先生にお声をかけていただいたテキスト作りや、日頃の先生との会話を通して会話の研究に関心を持ち、自分自身も会話のデータを取り、研究を始めるようになった（佐々木 2002）。

3. 研究の Path Dependence

本誌は、『言語文化と日本語教育』の特集号であるが、『言語文化と日本語教育』はお茶の水女子大学日本言語文化学研究会の研究会誌として 1991 年に創刊され、年２回発行されている。その理念として「真の日本語教育は、単なる技術論におちいることなく、日本文化の客観的かつ的確な理解にもとづいたものでなければならない。また、同時に日本の文化は適切かつ有効な言語教育によって、世界の人に理解されるようになってほしい。」（水谷 1991）と述べられている通り、収録論文には言語・文化・社会・教育にまたがる論文が多数見られる。次に本章の４つの論文に関係の深い論文を創刊号からとりあげ、高橋(1997)を参考にして、それらを「言語学的研究」、「状況論的談話研究」、「会話分析的研究」の３つに分類を試みる。

［言語学的研究］

創刊号：柏崎秀子「話しかけ行動と場面依存性－言語行動の実態調査＜中間報告＞－」 (発表要旨)

第 2 号：岡本能里子「会話におけるあいづちの機能―電話会話を分析して－」

第 4 号：山本恵美子「日本語学習者のあいづち使用実態の分析－頻度および種類－」

第 7 号：吉野文「電話の会話におけるかけ手と受け手の言語行動－開始部を中心として－」

第 8 号：藤井桂子・大塚純子「会話における発話の重なりについて－協力場面を中心に－」

第 9 号：岡本能里子「日本語の留守番電話の談話分析」

第 10 号：藤井桂子「発話の重なりについて－分類の試み－」

第 11 号：佐々木由美「日本人学生の異文化コミュニケーションスタイル－中国人・アメリカ人との日本語会話における「情報要求」発話分析－」

第 13 号：楊晶「中国人学習者の日本語のあいづち使用に見られる母語からの影響－形態、態度、タイミングを中心に－」

第 16 号：杉山ますよ「進行役とゲストの発話にみられる繰り返し」

第 16 号：松田文子「日常談話における反復表現の機能に関する一考察」

第 17 号：楊晶「中国語と日本語の電話における相づちの使用の一比較－形式と頻度の観点から－」

第 18 号：鶴見千津子「留守番電話のストラテジー－日本語母語話者と非母語話者の場合－」

第 19 号：石崎晶子「電話連絡の会話におけるスピーチレベルシフト」

第 21 号：伊藤明子、杉山ますよ、八若寿美子、藤井桂子「子供の電話会話における終結部の分析－成人との比較から－」

第 22 号：林美善「電話会話の終結部にあらわれる日韓の相違に関する一考察－日韓の 20 代の親しい友人同士の電話会話から－」

［状況論的談話研究］

第 10 号：新井眞美「turn-taking の関わりからみた教室内インターアクションにおける教師と学習者の役割」

第 22 号：松本明香「協働的対話場面で起こる日本語学習者の言語学習プロセスの考察－母語話者のフィードバックに対する学習者のリペアー」

［会話分析的研究］

第 19 号：近藤彩「国際見本市におけるインターアクション－日本人ビジネス関係者はどのように評価するのか－」

第 20 号：森下雅子「ミーティングにおける相互行為から見た日本語ボランティアグループ」
第 21 号：小笠恵美子「会話の談話展開における規範の分析－授業の話し合いを例にして－」
第 22 号：小笠恵美子「教師が話題の変化に及ぼす影響－授業中の話し合いの場合－」

本章の４本のレビュー論文は、これらの先行研究への Path Dependence（歴史的依存）によって生まれてきたものである。しかし、『日本語教育』（100 号・記念号）に載せられた既刊号の論文分類一覧を見る限りでは、この分野における日本語教育関連の先行研究はまだ少なく、４本の論文が今後、会話の「言語学的研究」、「（制度的状況を含む）社会学的研究」、「アジア諸言語の対照研究」さらには「日本語教育研究」に大いに貢献し、そこから生まれた研究が、私たちが今まで見ることのなかった事実をかいま見せてくれるであろうことを期待している。

参考文献

佐々木泰子(2002)「相談場面におけるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究－文章・音声の母語別比較』平成 13 年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(1)研究成果報告書，24-33.
高橋秀明(1997)「日本語談話研究文献案内」『対話と知談話の認知科学入門』新曜社，203-222.
水谷信子(1968)『ファミリー米会話　AMERICAN FAMILIES IN TOKYO』ジャパンタイムズ
水谷信子(1991)「創刊にあたり」『言語文化と日本語教育』創刊号　お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
茂呂雄二(1997)「談話の認知科学への招待」『対話と知談話の認知科学入門』新曜社，1-17.

（ささき　やすこ／お茶の水女子大学）